

月が金星に接近、金星が最大光度



天空が広がるうぶやまの高原は、厳しい残暑も終わり、秋の気配を感じさせる高原の涼しい風が吹いています。うぶやまの夜空には素晴らしい秋の星空が輝いています。

指針コラム (天体観・見どころ)

9月の星空情報の第2弾は9月14日(月)に日没後、西の低空で細い月と最大光度 -4.8 等級の大変明るい金星が接近するという天文現象です

9月14日、日の入後の西の低空で月齢3.3の細い月と金星が接近します。大変明るい金星と、細くても存在感のある月の競演は目を楽しませてくれるでしょう。日の入り後、少し暗くなったらすぐ西の空を見よう。

年初から日の入り後の西の空で「宵の明星」として輝いてきた金星は、9月19日に最大光度を迎え -4.8 等級という明るさで輝きます。澄んだ空では、昼間の青空の中に肉眼でも見つけることができるほどです。(誤って太陽を肉眼で直視見ないように注意してください。(次ページへ続く))

観察対象

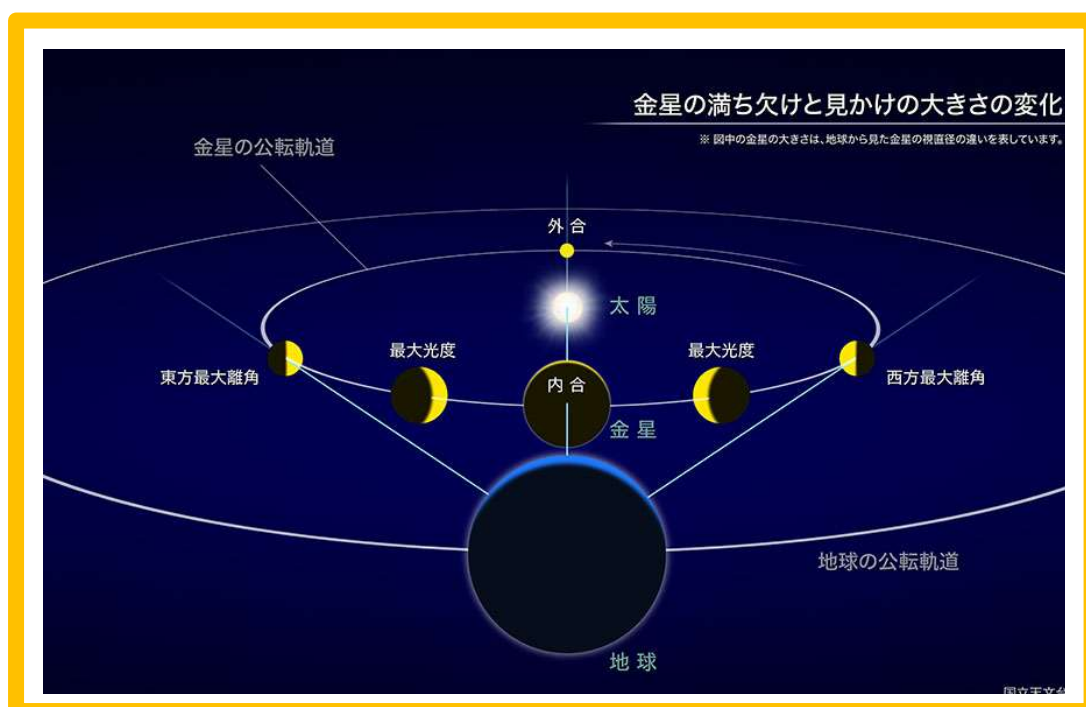


の頃の金星を望遠鏡で観察すると、三日月を思わせる細く欠けた形をしています。



クレジット 2026 国立天文台(NAO)

金星は、地球よりも内側を公転している惑星です。地球から見ると、太陽に照らされている面の見え方が異なるため、満ち欠けをして見えます。さらに、地球からの距離が大きく変化することで、金星の満ち欠け大きさも変化します。地球から見て金星が太陽の向こう側に位置する「外合」のころ、金星は太陽の光が当たっている面はほぼ全体を地球に向けており、丸く満ちています。しかし、地球から金星までの距離は遠く金星の視直径は小さくなります。そのため明るさは−3.9 等級ほどにとどまります。(次ページへ続く)



クレジット 2026 国立天文台(NAO)

外合を過ぎ、金星の見かけの位置が貸与から離れるにつれて、地球の側に回り込んでくる金星の、太陽の光りが当たっていない陰の部分が地球から見えてきます。このため、金星は徐々に欠けて見えるようになります。たとえば、金星の見かけの位置が太陽から最も離れる「最大離角」のころには半月のような形に見えます。見かけの変化と同時に、地球に近づくにつれて金星の視直径は大きくなっていきます。その兼ね合いで、徐々に金星の明るさが増していきます。

「最大光度」のころは、地球から見える金星面のうち太陽の光が当たっているのは4分の1ほどで、細く欠けた形に見えますが、視直径は外合の頃に比べて4倍も大きく見えるため、最も明るく見えることにむなのです。

金星は、10月24日に地球から見て太陽の手前に位置する「内合」となります。この時に金星の視直径は最大になりますが、新月のようにほぼ陰の部分を地球に向けているため、金星は一時的に暗くなっているはずです。こうした金星の満ち欠けは、約1年7ヶ月(583.9日)の期間で繰り返されます。

明るい金星は、空の低い位置にあっても存在感を放っています。機会があれば望遠鏡を使って、金背の形の変化を観察して見てください。ただし、金星の位置が太陽に近い時期は、誤って太陽を見てしまうと大変危険ですので、観察の際は十分注意してください。

金星のこよみ

2026年8月15日	東方最大離角
2026年9月19日	最大光度
2026年10月24日	内合
2026年11月30日	最大光度
2027年1月4日	西方最大離角
2027年1月13日	外合